

城井川水系河川整備基本方針

平成18年4月

福岡県

城井川水系河川整備基本方針

- 目次 -

1 . 河川の総合的な保全と利用に関する方針	1
(1) 流域及び河川の概要	1
(2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	2
2 . 河川の整備の基本となるべき事項	4
(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への 配分に関する事項	4
(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項	4
(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る 川幅に関する事項	5
(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するために 必要な流量に関する事項	5
(参考図)	
城井川水系図	6
基準地点 (馬渡橋) 横断図	7

1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

(1) 流域及び河川の概要

城井川^{きいがわ}は、福岡県の東部に位置し、その源を英彦山^{ひこさん}山系から耶馬溪^{やまげい}へと続く山稜の中津市^{なかつし}と築上町^{ちくじょうまち}の町境付近に発し、下本庄地先^{なかがうちがわ}付近で中河内川を合わせ、河口付近で岩丸川^{いわまるがわ}、真如寺川^{しんにょじがわ}を合わせて周防灘^{すおうなだ}に注ぐ、流路延長約 22.6 km、流域面積約 94.2 km²の二級河川である。城井川という川名は築上町寒田にある城井城に由来していると言われている。

城井川流域は、築上町を貫流しており、古くから社会・経済・文化の基盤の 1 つをなしている。また、上流域は耶馬白田英彦山^{やまびたひこさん}国定公園に、河口付近は筑豊県立自然公園に指定されており自然環境にも恵まれている。

城井川流域には、国の天然記念物に指定されている「本庄の大樟」^{ほんじょう おおくす}や、県指定の文化財である「紙本著色怒天神像」^{にしやまそういんひつれんがかいし}、「西山宗因筆連歌懐紙」などの文化財が、「三丁弓の岩」「城井城跡」等の、戦国時代に豊前地方を治めた宇都宮家ゆかりの史跡が点在している。

城井川流域の地質は、新第三紀の輝石安山岩・凝灰角礫岩^{きせきあんざんがん きょうかいかくれきがん}の火山岩類が流域に広く分布し、西側の一部には白亜紀後期^{かこうがん}の花崗岩類が分布している。また、城井川筋には砂礫、粘土等の沖積層^{ちゅうせきそう}が分布し、沖積平野を形成している。

城井川流域の気候は、瀬戸内気候に属しており年平均気温は約 16℃、年平均降水量は約 1,600 mm であり、梅雨期に降水量が多くなっている。

中河内川の合流地点までの上流域は、一部が耶馬日田英彦山国定公園に指定されており、スギ・ヒノキの植林も多くみられるが、その中を河川は北流し、緩急を繰り返しながら流下している。河床は、転石が多く岩が露出しており、カワムツ、オヤニラミ（環境省レッドデータブック準絶滅危惧、福岡県レッドデータブック準絶滅危惧）、アカザ（環境省レッドデータブック絶滅危惧 類、福岡県レッドデータブック絶滅危惧 B 類）、カワセミ（主要野生動物）が生息している。周辺には、牧^{まき}の原^{はら}キャンプ場、牧の原桜公園があり、夏には水遊びや散策の場等として人々に利用されている。また、川沿いには棚田や少数ながら集落も見られる。

馬渡橋までの中流域は、川幅が急に広くなり、川沿には水田・畑が見られ、下流に向かうほど集落が形成されている。河床は転石、砂礫で覆われ、取水堰が多数存在するため、大部分が堰の湛水域となっている。河川にはツルヨシ群落が至る所に見られ、オイカワ、カワムツ、オヤニラミ（環境省レッドデータブック準絶滅危惧、福岡県レッドデータブック準絶滅危惧）、カワセミ（主要野生動物）、コサギが生息している。

河口までの下流域は、国道 10 号、JR 日豊本線が通過している。また、椎田駅周辺では、役場を中心に市街地が形成され、周囲にはスポーツ施設等もあり、人々に広く親しまれている。下流域は、取水堰も多く大部分が湛水域となっている。河床は、主に砂礫、砂で形成され、河口付近ではトビハゼ(福岡県レッドデータブック絶滅危惧 B 類)・ボラ等が生息している。また、ウラギク(環境省レッドデータブック絶滅危惧 類、福岡県レッドデータブック絶滅危惧 類)も確認されている。

城井川の水質は水質汚濁に係る環境基準の類型指定状況を見ると、赤幡橋より上流が AA 類型、下流が A 類型に指定されている。BOD75%値でみると A 類型に指定されている浜宮橋では基準値を満足しているが、AA 類型に指定されている赤幡橋では、平成 9 年度から 11 年度には基準値(1.0 mg/l)を上回っていたが平成 12 年度以降は満足している。

城井川流域は、梅雨期に降雨が集中しており、過去幾度となく大雨によって災害に見舞われている。主な洪水としては、昭和 42 年、昭和 58 年、平成 7 年の水害がある。特に平成 7 年 6 月の洪水では浸水面積 22.7ha、浸水被害 36 戸という被害を受けている。

城井川流域の河川水は、かんがい面積約 1,530ha の農業用水として、約 330 カ所の取水堰より取水されており、古くから農業用水として利用されている。また、一部では上水道用水として伏流水が取水されている。

(2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

城井川水系における河川の総合的な保全と利用に関する基本方針としては、河川改修の現状、水害発生の状況、河川利用の現況、開発、河川環境の状況、並びに森林の持つ水資源かん養機能等を考慮し、かつ、「ふくおか新世紀計画」、「豊前築上地域河川環境管理基本計画」をふまえながら、水源から河口まで一貫した計画のもとに、段階的な整備を進めるに当たっての目標を明確にして、河川の総合的な保全と利用を図る。

ア．洪水による災害の発生の防止又は軽減に関する事項

城井川は、想定氾濫面積・想定氾濫区域内の資産状況等を考慮したうえで、50 年に 1 回程度の確率で発生する規模の洪水を安全に流下させることのできる整備を目指す。

また、整備途上における施設能力以上の洪水や、計画規模を上回る洪水に対しても、被害を極力抑えるよう配慮する。

特に城井川流域では、その地形特性により河川が谷ごとに流れており、河川ごとに上

流まで人家が見られる。さらに、地域の高齢化が進んでおり現在でもスピーカー、電話連絡等の連絡体制は整っているが、洪水等の発生時の被害を最小限に抑えるため、水防体制の支援、災害関連情報の提供、洪水時における情報伝達体制及び警戒避難体制の整備等を関係機関や地域住民等と連携して推進する。

イ．河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する事項

河川水の利用に関しては適正かつ効率的な水利用が図られるよう、関係機関と連携して、河川環境、河川水の利用状況等、現況流況の把握に努める。さらに、健全な水循環の構築や良好な水質・水量の確保・保全を図るため、関係機関をはじめ、流域全体で一体となって取り組んでいく。

また、渇水時には関係機関と協議しながら、被害が最小限となるよう水資源の有効利用に努めるものとする。

ウ．河川環境の整備と保全に関する事項

河川環境の整備と保全にあたっては、国定公園の一部をなす上流域では、現況の自然環境の保全に努める。

中・下流域においては、治水・利水面との調和を図り、多様な動植物の生息・生育環境に配慮した瀬・淵等の保全を行うとともに、地域住民のニーズに配慮し、環境教育・環境学習の場として利用できる、人と河川の触れ合いの場の整備と保全を行う。

エ．河川の維持管理に関する事項

河川の維持管理に関しては、「洪水による災害の発生の防止又は軽減」、「河川環境の保全」の観点から、河川に関する情報を地域住民と、共有することを努め、住民参加による河川管理を支援しながら、地域住民と連携し河川の維持管理を適切に行う。

2. 河川の整備の基本となるべき事項

(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項

基本高水は、そのピーク流量を城井川基準地点^{うまわりばし}馬渡橋において 730m³/sec とし、これを河道へ配分する。

表-2.1 基本高水のピーク流量等一覧表 (m³/sec)

河川名	基準地点	基本高水のピーク流量	洪水調節施設による調節流量	河道への配分流量
城井川	馬渡橋	730	-	730

(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項

計画高水流量は、基準地点^{うまわりばし}馬渡橋において 730m³/sec とする。

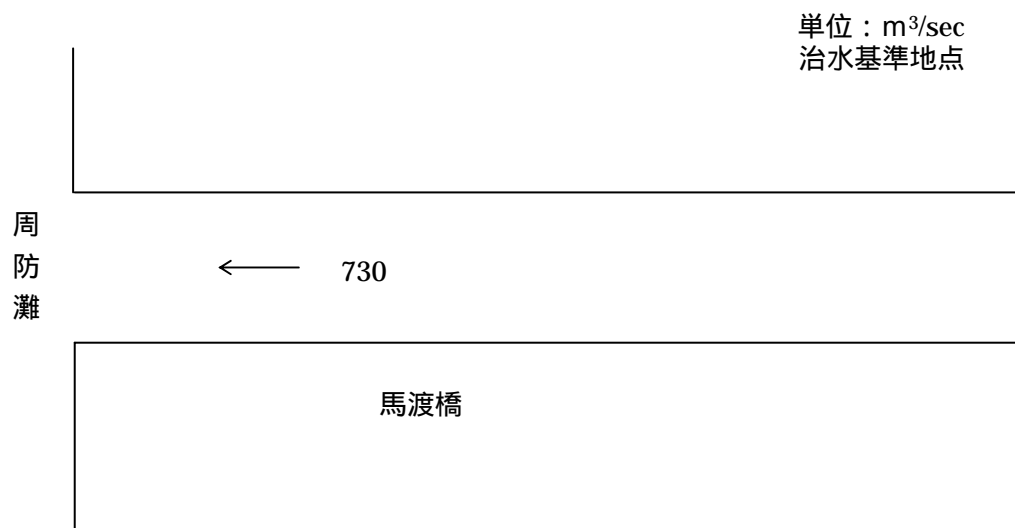


図-2.1 城井川計画高水流量図

(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項

本水系の主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る概ねの川幅は、次表のとおりとする。

表-2.2 主要な地点における計画高水位及び川幅一覧表

河川名	地点名	河口からの距離 (km)	計画高水位 T.P (m)	川幅 (m)	摘要
城井川	うまねたりばし 馬渡橋	3.2	+18.89	85	基準地点

(注) T.P:東京湾中等潮位

(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項

流水の正常な機能を維持するために必要な流量に関しては、今後、流量データの蓄積、水利用の実態把握等に関する調査検討を行う。

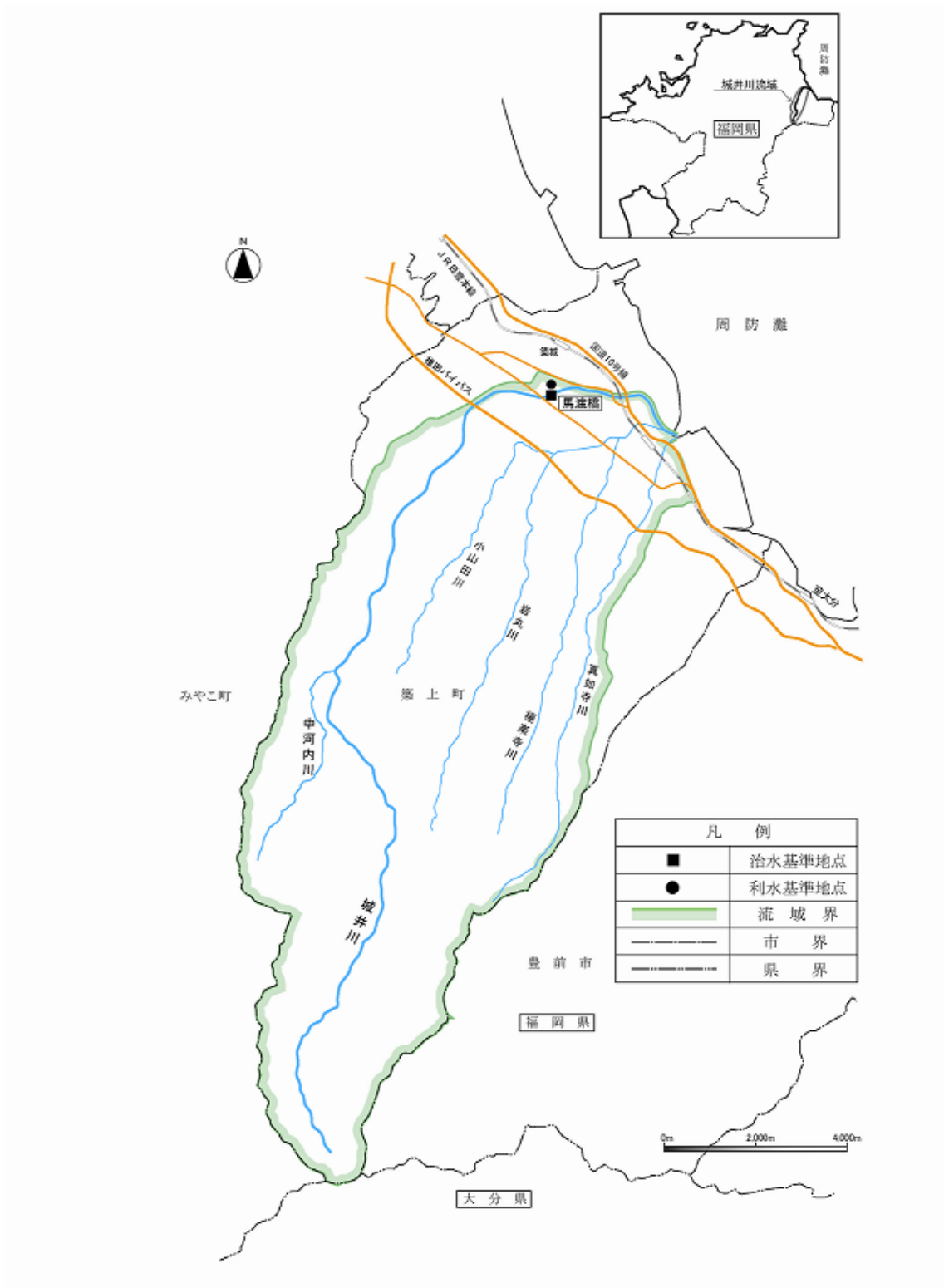


図-参.1 城井川水系図

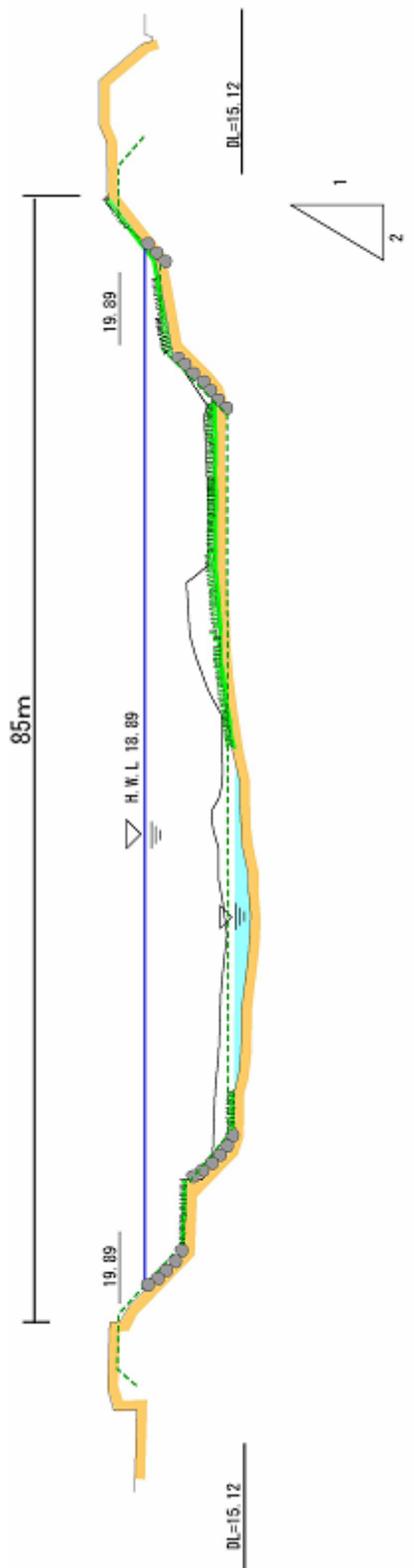


图-参.2 基准地点（馬渡橋）横断面图